日本聖公会東京教区　大森聖アグネス教会

恵ごめ便り

２１９号
イースター版
２０１６年（平成２８年）
４月１７日発行
編集・印刷：
馬込便り編集グループ
＜題字　故黒田浩子姉＞

あなたがいるから 私がいる(I am because you are)

司祭　ヨナ　成（そん）　成鍾（そんじょん）

アフリカの南部には、‘ウブントゥ(UBUNTU)’という精神が受け継がれている。ウブントゥは、共同体的な愛と友情の大事さについて示す言葉であるが、ウブントゥに因んだ次のような逸話がある。

ある人類学者がアフリカのある部族の子どもたちにクッキー取りのゲームをしないかと誘った。木の枝にクッキーをかけておいて、速く走って先に着いた人がたくさん食べられるというルールを説明した後、スタートのサインを送った。ところが、子どもたちは別々ではなく全員が手をつないで走り、木のところに着いたら一緒にクッキーを食べ始めた。人類学者は、早く走れば独り占めすることができるのに、なぜ一緒に手をつないで走ったのか、と聞いた。すると子どもたちは声を合わせて“ウブントゥ”と言って、友だちが悲しんでいるのに、どうやって一人だけが幸せになれるのか、と答えた。

この逸話によるとウブントゥは、世の価値基準や倫理を超えた、神に模せられた人間同士による友情と愛の営みだと言える。ウブントゥは普段の挨拶の言葉としても用いるが、南アフリカのズールー(Zulu)語で“あなたがいるから私がいる(I am because you are)”という意味である。ウブントゥは人という存在は独りではなく、相互の関わりと絆によって生かされていることを示す。つまり、人は他者との関わりを通して人格が形成され、人々との交わりの中で人間になっていく、ということを表わしている。人間のアイデンティティが、西欧の個人主義の場合は可能な限り他者から独立することによって形成されると認識する半面、ウブントゥは家族や友人との交わりを通して、また関わる共同体の中で形成されていく、という古き知恵である。インテグラル思想(Integral Psychology・Spirituality)の提唱者であるアメリカの心理学者ケン・ウィルバー(Ken Wilber、1949－)は、心理的に未熟な人は、全体から自分を分離し客観化することによって自己アイデンティティを確認しようとする傾向があると指摘したが、それに沿って人類の文化や精神についての理解は考え直すことが求められる。

世の価値基準を超えた愛と友情の営みとしてウブントゥは、人々との関わりについて多くの示唆を与える。経済論理と個人主義が支配している世界に生きている多くの人々は、ある日突然、他人や自然世界から断絶されている自分を発見し、いつも独りぼっちになっていると感じる。彼らは、人々だけではなく、動物や自然などの命あるものとの親密感と交わりを恋しがる。陳腐な価値を嫌がる多くの若者の場合は、肉体的な感覚や思弁的な思考の向こう側、そして機械的唯物論という牢屋を超越する神秘との関わりを、多方面から探っている傾向もある。つまり、現代人の意識と生き方は、人間として持つべき本来の姿と関係性を取り戻し、進むべき意識の深化を求める傾向にある。ところが、それは決して新しい価値への追求ではない。とりわけキリスト教に準じると、それは古くからの教えである。ウブントゥの意味である“あなたがいるから私がいる”という相互関係性は、聖書と教会の根本的な理解であり、キリストの生き方そのものである。キリストは、三位一体の神との関わりを始め、人々の交わりを通して自ら友情と愛の模範を示されながら、人類を神秘そのものである神へと導いた。　**＜3ページへ続く＞**

日本聖公会　大森聖アグネス教会　東京教区
牧師 司祭 フランシス 下条 裕章（しもじょう ひろあき）
〒143-0025　東京都大田区南馬込1-58-8
Tel&Fax：03-3771-3459
e-mail：st.agnes.omori@gmail.com
ホームページ：www.nskk.org/tokyo/church/oomori/

＜巻頭言より＞

またその精神を受け継いだ教会は、共同体内においては、互いに声に傾聴しながら対話することや交わることを大事にし、共同体外に向けては、人々を‘歓待(ホスピタリティ：hospitality)’、‘傾聴’、‘執り成しの祈り’を挙げてキリストに結ばれたものの生き方についての理解を深め、最後に人々と関わることについての具体的な実践を提案することとする。

西欧化された個人主義世界に生きている現代人にとって、人々と関わることはどういうことなのか。西欧の産業社会は、性関係以外には他人を必要とすることも頼ることもなく、自力と自負心を持つ自律的な個人になることを理想とし㊟、 理念化された個人主義は、国境を越えてあらゆる文化と精神に浸透され、近代を貫き世界を支配してきた。ところが、個人主義と自己中心性という理想は、人々の間に疎外や愛情欠乏を招き、人格や関係性の崩壊などを負の遺産として世に与えたと指摘されている。とは言え、未だに個人主義と自己中心性が価値のある理念として猛威を奮っている状況の中、西欧の価値と文化から多大なる影響を受けているキリスト者は、人々と関わることをどのように理解する必要があるのか。

㊟Albert Nolan『今日のイエス：根本的な自由の霊性』ユ・ゾンオン訳(ブンド出版社、2011)、p.33.